

論文番号	10 (第 10 回研究会 2012.11.24 於青山学院大学)
タイトル	新聞における混種語の使用実態の一考察：語種構成を中心に
著者名 (所属)	時岡範子 (恵泉女学園大学大学院 人文学研究科 文化共生専攻 2 年)
連絡先 E メール	tokiokanoriko@yahoo.co.jp
<p>論文内容</p> <p>(背景および研究目的) キーワード：①混種語 ②語種構成 ③結合関係</p> <p>私たちが毎日目にする新聞の紙面には、「海外向け鉄道運行システム事業」「スマートフォン向け半導体メモリ」「サブプライム住宅ローン問題」などの字面の長いひとまとまりの一語がたくさんつかわれている。これらの混種語の使用実態について語種構成を中心に考察し、混種語の存在意義を考える。</p> <p>(検討方法等)</p> <p>調査資料は、朝日新聞の朝刊 (2011 年 8 月 1 日～9 月 30 日) 2 カ月分である。生活する上で基本的な情報と思われる「政治」・「経済」・「社会」の 3 分野と、生活に潤いを添える「文化」と、専門的と思われるが実は身近にある「科学」をとりあげた。これらの各面種毎に、1 日 1 ページ分の紙面から「混種語」を取り出し、語種の組み合わせごとに分類し、考察した。</p> <p>(結果および考察)</p> <p>語種の組み合わせについては、従来多くをしめていた「漢語・和語」の組み合わせより、「外来語・漢語」が多くなってきていることが分かった。これは、現代日本語における単純語としての「和語」、「漢語」、「外来語」の頻度において、特に「外来語」の増加の影響があるためだと考えられる。しかし、同じ外来語を使っても「外来語・和語」の組み合わせは非常に少なくなる。(「外来語・漢語」の約五分の一。) これらの傾向は、漢語の分析的で簡潔であるという性格や、外来語の一義的で比較的新しいという性格や、和語の基本的な意味を担うという性格など、各語種独自の特徴によるものと思われる。また、混種語成分の結合に関して言えば、大きく分けて複合語と派生語がある。複合語の多くは日本語の統語構造と同じように主語＋動詞、目的語＋動詞、修飾語＋被修飾語などのいくつかの型で構成されている。</p> <p>(結論)</p> <p>同種の語種による合成語を使わずに、出自の異なる語種を結合した合成語を使うことに混種語の存在意義があると思われる。つまり、混種語は、各語種が選択できるというメリットを利用して、選んだ語種に、表現者の意図をより有効に伝達する手段として存在している。そこには、さまざまな要求 (字数の制約、各語種に託された意味の伝達、新しさ、わかりやすさなど) があり、混種語はそれらを考慮しながら既存の内部構造を逸脱しない範囲で、各語種独自の性質を利用しながら、各々の意味的特徴をつないで一語として使われる。今日においては、人、物質、情報の往来がスピード感を増し、社会情勢も一層複雑になってきている。このような状況のもと、人々の要求や価値観も多様化・複雑化している。そこで、これらを表現する方法として、混種語の利用はますます増えてゆくものと思われる。</p>	
<p>参考文献</p> <p>斎藤倫明・石井正彦編 (1997) 『日本語研究資料集第 1 期 13 巻 語構成』ひつじ書房</p> <p>阪倉篤義 (1966) 『語構成の研究』角川書店</p> <p>白井清子 (1989) 「現代の混種語—その語構成と形態素」『大野晋先生古稀記念論文集 日本研究一言語と伝承』</p> <p>玉村文郎 (1984・1985) 『語彙の研究と教育 (上) (下)』大蔵省印刷局</p> <p>野村雅昭 (1989) 「語構成」『講座 日本語と日本語教育 第 1 巻 日本語学要説』明治書院</p>	